
野球馬鹿に恋をした。

kamall

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球馬鹿に恋をした。

【Zマーク】

Z4286F

【作者名】

kamail

【あらすじ】

あたしは中学校2年生の終りに君と出会った。真黒に焼けた肌、溢れる笑顔。そんな野球馬鹿で優しい君に恋をした。大好きだったあの時は忘れない。

..出版ご（複数形）

読み辛い所もありますが……ぬに見てやつて下わこ
わ

：出会い

正太と出会えて、正太に恋して本当に良かった。

あたしと正太が初めて会ったのは中学校2年生の終りだった。

あたしが転校生、正太が学級委員。

一番初めは何の意識もしてなかつたのに、いつの間にかこんなに大好きになつてた。

きつかけなんて無かつた。ただ知らないうちに正太の姿を田で追つてた。

正太は野球バカでいつも本当に馬鹿みたいに一生懸命練習してた。

あたしは陸上部だったから、野球部とは練習場が隣同士だった。

それをいいことにあたしは練習の合間に何度も振り返つて野球グラウンドを見てた。

それが原因で先輩に怒られたこともあった。

でも正太はあたしが怒られてるのを見つけるといつもいたずらっ子のような目であたしを見た。

それがなんだか嬉しくてあたしは笑顔を返してた。

そんな正太も練習中はまるで別人だった。

真剣な顔で空に舞う白球を見つめていた。

正太の日に焼けた黒い肌と光る汗、真っ白な雲に青すぎる空。

それが綺麗に重なってあたしは時間も忘れて見入ってしまった。

まあ結局先輩に怒られちゃったけど。

それでもその光景はあたしの眼に焼き付いていた。

この頃からあたしは正太の事を好きだったんだと思う。

部活が終わると正太は真っ先に家に帰る。

塾とか弟の世話があるらしい。

そんな所もしつかりしてゐなーと思った。

正太の学校での仕事はこつだ。

学級委員・体育委員・英語係・理科係・野球部の2年主将・記録員。

これだけの仕事をやって、なおかつ家事に塾。

正直超人だと思う。

そんな責任感が強くて、みんなに好かれてる正太の事が本当に大好きだった。

これがあたしと正太の出会い。

あたしが転校してきて初めての行事は、
「文化祭」だつた。

まあ文化祭って言つても展示をしたり、劇をしたりするだけなんだ
けど。

ちなみにあたしのクラスは
「展示」で、
プラネタリウムをやることになつていた

「ねえー 加藤ーー！」つち手伝つてよおー

女の子特有の甘い声が飛んだ。

加藤つていうのは正太の苗字。

正太は背はあんまり大きい方ではなかつたけど、野球部つてことも
あって
ガタイは良かつたから、力仕事の時には引っ張りだこだつた。

「ちょっと待つてーこれ終わつたらすぐ行くから

正太はその女の子に向けて、屈託のない笑顔を向けていた。

あたしの中で何かがつづかえた気がした。

それに運悪くあたしはプラネタリウムの本体作成部隊で正太は展示物作成部隊だったから、話す機会も少なくなつていつた。

そんな中であたしに声をかけてくる男の子が居た。

その名も

「池ちゃん」

頭がよくて、サッカー部のキャプテンで、性格もいい非の打ちどこうがない完璧な男の子。

でも一つ欠点は、背が小さいこと。

それは自分でも自覚してるようで、身長の話は池ちゃんの前ではタブーになっていた。

そんな池ちゃんはあたしと同じ本体作成部隊だからよく話していた。

作業をするのも忘れて話し込んでいた時もあった位に。

池ちゃんはあたしにとつていつの間にか
「親友」という位置付けになっていた。

池ちゃんには何でも話せたし、話してくれました。

もちろん正太の事も相談した。

色々話してて分かったのは、正太にとつてあたしは

「友達」

以外の何でもないってこと。

なんでも正太には好きな人が居るらしくて、その子以外は見えない
そう。

あたしに勝ち目はないって事。

何となく分かってたけど、現実に言われるとショックな部分も多か
つた。

落ち込んでるあたしに池ちゃんは温かく接してくれた。

その温かさがその時のあたしにはとても心地よかつた。

そんなことをしてお文化祭の準備は着々と進んでいった。

始めは何となくしか出来てなかつたプラネタリウムも今では立派な
物になつていた。

あとは明日の本番を待つだけだと意氣込んでたあたしに、誰かが話
しかけてきた。

振り返つてみるとそこには、あたしが求めてる人物がいた。

坊主頭に黒い肌、細い眉毛に優しそうな瞳。

正太が話しかけてくれた。

「おおー！…すげえ。お前、よくここまで仕上げたな…！…まじすげ
えよ

オーバーな位のリアクションで褒める正太にあたしはちょっと苦笑いをした。

「正太は大袈裟だよ！でもありがとうね」

あたしがそういうと正太は太陽のような笑顔で笑ってくれた。

あたしはこの笑顔が自分だけの物になればと、願わずにはいられなかつた。

その後もあたしと正太は延々と話していた。

すっごく楽しくて、このまま時間が止まればいいのについて思つたりもした。

本当に幸せな時間があたしは過ぎていた。

でもこの時あたしは、2人を見つめる人影に気が付かずにいた。

明日はいよいよ文化祭当日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4286f/>

野球馬鹿に恋をした。

2010年10月11日17時39分発行